

## リトミック指導を通して見た 音楽的諸能力発達の追跡調査 (その1)

柏瀬 愛子

### A Follow-up Survey on the Development of Musical Abilities Through *Rythmique* Guidance (Part 1)

Aiko Kashiwase

#### はじめに

コダーイ・ゾルターン (Kodály Zoltán, 1882~1967) は、「音楽教育はいつ頃から始めるのがよいのか」という質問に対し「生まれる前9ヶ月」と答えたと言われている。さらに、音楽を構成する要素の一つである音程感を例にとっても、生後早い時期から好ましい環境に置かれ適切な音刺激を与えられた場合、絶対音感の獲得率は3歳で95%と報告されている。また、医学的な見地からも、音は知恵の根源と見なされている。その理由は、聴覚が非常に早くから発達し、胎児期より聞く力を備え、その力は生後さまざまな音を通して人間生活を営むに必要な諸事項を吸収しながら知的発達並びに身体諸機能の発達を促し、バランスのとれた生活態度の萌芽を培っていくからである。こうしたことから見ても、音が主体となる音楽は、人間形成期である乳幼児期の保育活動に欠かせない重要な役割を占めるものである。

音楽活動の与え方や指導の方法は、子どもの心理や生理に適合したものであることが望ましい。そこで、乳幼児の心身の発達からその指導方法を考えたとき、身体全体で反応する活動、すなわちリズムを中心としたもの、特に自分が持つリズムを基本とした活動(リトミック)は、年齢が低いほど好まれる傾向にあり最適と思われる。

幼児音楽教育の中でのリトミック指導に対する脚光は以前からあったが、独特な音楽指導の一手段として解されがちで一般化されないままにこんにちに至っている。しかし、経験から題材を引き出し、創造性を育むことが出来るリトミックを、もっと保育の中で扱ってほしいと願い、活動を通し子どもの音楽的諸能力の発達を追跡しながらその指導方法を確立させることを目的とし本研究に臨んだ。

#### I リトミック (Rythmique) 教育について

##### 1 リトミック教育の創始者、エミール・ジャック・ダルクローズ

リトミック教育は、エミール・ジャック・ダルクローズ (Émile Jaques-Dalcroze) によって創設された技法である。彼は、作曲家並びに音楽教育家であり多岐にわたる才能の持ち主で、即興演奏は無類のものであったと言われる。また、シャンソンや童謡の作曲は、リトミック教育と同様に世界中に知られている。彼の主な経歴を抜粋すると、

1865年7月6日オーストリアのウィーンにてジャック家の第1子として誕生。幼名アンリ。ジャック家はスイスのヴォー州サンクロワの出で、家族全員が音楽演奏をたしなむという知識

階級に属していた。父は新教の牧師の一員でもあり時計商社の代表人でもあったことから、アンリの幼年期は幸せそのものであった。

1871年、6歳になったアンリは、ピアノのレッスンを受けるようになる。また、彼の音楽的才能に多大の影響を与えることになったのが、毎日曜日に開催されていたオーケストラ・コンサート（ヨハン・シュトラウス指揮）であった。

1875年、ウィーンからジュネーヴに引っ越す。私立小学校に入学、2年間在籍する。

1877年、中学とジュネーヴの音楽学校とに同時入学する。中学では2つの賞を、音楽学校では卒業するまで首席で通したと言われる。

1881年、高等学校に入学。ベル・レットルというサークルに入会。シャンソンを書き始める。また、学生仲間で上演されたオペレッタ「小間使い」の作曲を手がける。

1883年、音楽学校中等教育を終了。一応ジュネーヴ大学に籍を置くが、明確な目的がなかったため退学。従兄弟のボナレルが指揮者を務めるローザンヌ劇団から誘われるままフランス巡業に出かけていく。ベル・レットルの正規会員は脱会するが俳優として協力していく。

1884年、音楽と芸術学を学ぶためにパリに出る。フォーレの紹介によりラヴィニヤックに師事する。また、一日中音楽が鳴り響いているという環境のアパートに移り住み、ここに住む多くの音楽家たちと付き合うようになる。

1886年、音楽の夕べを企画。雇われたホテルで知り合った作曲家アドレーよりヌーヴォーテ劇場の第2指揮者となることを勧められる。この仕事を受けたことによりアルジエに滞在することになった。ここでリズムの意味を知り生涯を決定的なものにすることとなる。

1887年、ウィーンの音楽学校に再び入学。ピアノをはじめ和声学、対位法、作曲など音楽全般に付いてフックス、ブルックナーなどの著名な教授陣に師事する。

1889年、2年間の勉学を終えパリへ戻り、リズムと表現の法則についての研究第一人者であるマチス・リュシイ（スイスの音楽家）の授業を受ける。このときリュシイによりリトミック探究の道に導かれる。即興演奏家としての才能が高く評価されだす。

1892年、ジュネーヴ音楽学校の最上級和声理論・ソルフェージュの教授となる。

1896年、スイス・ロマンド音楽新聞の編集者となる。

1899年、豊かな音楽的感覚と美声を備えたマリア・ストラス（通称ニーナ・ファリエロ）を妻に迎える。彼女は、スイスやヨーロッパの大都市で、夫ダルクローズの作品であるシャンソンを歌い、歌曲の評価を際立たせるものとする。

1901年、聴覚能力を発達させるという考えが浮かび、リトミックの体系を形成させる。

1902年、ローザンヌの音楽学校でリトミックの思想を講演。支持者の協力を得て、ヴォ州の連邦国家加入百年祭の行事の1つを請け負う。同年秋にはジュネーヴ音楽学校で、リトミックの試行のための特別クラスを開く許可が与えられる。これによってリトミックの実践的研究が進められ1904年には、体育の基本的要素が音楽のリズムに基礎を置くと宣言。また、翌年にはサン・ピエール劇場（ジュネーヴ）でリズム体操の授業講座を開くなどしている。

1909年、一人息子ガブリエル誕生。リトミックの生徒5名を伴い、オーストリアをはじめドイツ、ドレスデンで実演巡回。支持者の1人ドールンからヘレラウにダルクローズ学院（教育施設）の設立が提案される。

1910年、18年間勤めたジュネーヴ音楽学校の教授を辞す。名誉教授の称号と金メダルを授与されると同時に、同大学からは博士号を授与される。

1911年、予ねてより計画されていたジャック・ダルクローズ学院がヘレラウに完成し就任。

学院はリトミックの体系を学ぶために、世界各国より著名な芸術家や作家たちが訪れ、たちまち高名をはせ国際的なものとなっていった。

1914年、第一次世界大戦によって権力の強まったドイツの命令によりヘレラウ学院は閉鎖。ジュネーヴ音楽学校より復帰の要請があったがこれを断る。しかし、翌15年に学校と協定したダルクローズ学院を創設、授業が始められ人気を呼んだ。ちなみにその生徒数約20年間に46ヶ国7253名と報じられている。

1925年、ジュネーヴ州より名誉市民の称号を授与される（60歳の記念）

1926年、国際リトミック教育者協会が創立。名誉会長に就任。この国際的な協会の他にも、各地域でのダルクローズ協会が相次いで発足。日本では1930年に結成されている。

1936年、シカゴ大学より名誉博士の称号を授与。

1943年、スイスの音楽協会の名誉会員となる。

1945年、ローザンヌ大学より名誉博士の称号を授与。

1946年、第1回ジュネーヴ市賞の音楽部門に選ばれ受賞。妻マリア・ストラスに先立たれる。

1949年、スウェーデン政府よりダルクローズ学院に年金が与えられるようになる。イギリス政府からはダルクローズ・トレーニング学校の正式認可を。またベルリンの音楽専門学校でもリトミックの授業が再開されるなど多望の年であった。なおニューヨークのダルクローズ音楽学校が合衆国最優秀音楽学校の1つに認められたり、フェラン大学や学院の名誉博士の称号授与など喜びごとの続いた1年であった。

1950年7月1日、音楽教育に徹した85年の生涯を閉じる。ジュネーヴ州議会は名誉市民に敬意を表し学院を保護、財団贈与のため施設を買い上げる。なお州議会は後年（1958）ダルクローズの名前を町の大通りの1つに付け彼の業績を称えている。

この他に職業人としてのダルクローズについて補足するならば、音楽学校の学生であった頃からすでに作曲家として活躍。シャンソンをはじめオペラなど多くの作品を残している。これらの作曲は、即興演奏同様、優れた能力が発揮されるものであったと評されている。

青年期から晩年にかけての作品は演劇的なものをはじめ、協奏曲、ピアノ曲、歌曲、合唱曲、他あらゆるジャンルに及んでいた。一方、自作品の公演をするとき演技者として舞台に立つこともしばしばであったとされる。また、各地で行われる音楽祭の企画参加や演奏をしたり、独自での作品発表演奏会もたびたび開催している。この他、音楽新聞の編集（1896）定期刊行物「スイスの音楽」の編集（1901）など音楽に関わる刊行物の編者、発行への関与もしている。教育関係では、音楽学校で教鞭をとる傍ら、各地の大学をはじめ音楽団体での講演、講座の設立、幅広い年齢層を対象としたリトミック教室を開くなど、その足跡は多大なものであった。

## 2 ダルクローズの教育思想と理念

リトミックとは「よいリズム」ということを示す。それ自体は芸術ではないが、音楽の感動を全身の筋肉と精神によって具体化できるという考えから体系化されていったものであり、音楽と人間の身体的行動ならびに運動を融合させる教育体系の呼称なのである。なお、語源は古来ギリシャに由来し「律動的調和」の意味をもっている。この教育方法に対するダルクローズの教育思想を大まかに纏めてみると、子どもを完全に音楽的にするためには「精神と肉体とを結び付ける能力を与えなければならない」という考えを基盤にした項目と、人間の感覚陶冶を目指した項目とに分けられる。前項目では、リトミックが動きと音楽と言葉の3位が1体となる総合芸術教育であり、技術や技巧にとらわれない創造性や想像性のある人間教育としての音楽教育であることを、後者では、音やリズムに対し全身で反応し行動すれば、感覚力、視覚、触

覚の機能が高められる。さらに頭脳と身体との連絡を密にさせ一体となって反応する力を高めさせれば感覚の鋭敏化も図られる。そこで子どもが生来もっている拍子感やリズム感を基礎とした音楽教育で音楽的表現を豊かにさせようと説いている。

その理念は心の解放とよりよき自己の表現、そしてさまざまな音の探究から美を知り感動をもたせるようにするなど、技術的な教育より以前に、感覚的な教育を行い敏感な感受性を養うようにすることなのである。

### 3 3位1体の総合芸術教育とは

リトミック教育の基本となるものであるが、指導される対象により、その内容や方法は多少違ってくる。また、学習させるに当たっては教材を通して互いに関連性を持たせ、系統的かつ段階的に経験を重ねさせていくものであって、訓練であってはならない。内容は以下の通りである。

#### ① リズム運動

全身をリズムに対する感覚に目覚めさせる（訓練によって筋肉組織と神経中枢間の連絡が密になれば時間と空間の力、弾力性などについての感受性や表現力が発達する）学習と、リズムの聴覚的見解に目覚めさせる（力と時間の兼ね合いを感受し表現する能力の発達と音の長さ、音に対する自然な感受力が発達する）学習である。

#### ② ソルフェージュ

音高、音の関係、音質などを識別する能力を目覚めさせながら、内的聴感覚を育成し音の強弱、速度など細かな特色を知らせ、表現、即興、創作の力をもたせるとともに、音楽基礎能力をつける学習である。

#### ③ 即興演奏

動的感覺を目覚めさせ、身体での自然な表現をはじめ、言語表現、音楽思考表現（旋律、和声とリズムなど、いろいろな楽器での演奏。理解できる年齢にあればピアノ演奏の基礎となる練習も含める）が出来るようにさせる学習である。

### 4 リトミック教育の目的

音楽に身体を感応させることによって、音楽に対応する感情を動きの形で表現する。すなわち心に感じたことを体で表すという、心と身体の実確な関係を確立させることが大きな目的である。音楽の感動を全身の筋肉と精神によって具体化させていくということは、

- ① 楽を構成している要素を知り、音楽を理解し音楽的成長の道を見出す。
- ② さまざまな活動経験を通し集中力、注意力、創造力を育み、筋肉運動感覚の蓄積をする。
- ③ 身体を通して音楽構成のしくみ、要素（音の高低、強弱、速度、拍子他）を認識させるなどである。従って、こうした内容の習得がリトミック教育の目的となる。

## II 幼児とリトミック

幼児期こそリトミック教育が最適であるとされる。その理由は、人間の感覚的成長が幼児期に最も著しく発達するからである。また、乳幼児は鋭い感受性と自然に物事を受け入れる能力を持ち、感覚的に行動する一方、内面に秘められている音楽的才能が刺激に対し反射的に反応し、恒常的に平行成長している頭脳を通し、その行動内容を身体に伝えていくからである。リトミック教育のねらいが、この反射的反応の手段に訴え潜在意識の増大を図りながら、もろもろの教育効果をあげていこうとするものであるから、単に耳からの吸収だけではなく、全身で感じ取る音楽と動きが同時進行する幼児期に必要なとされるものなのである。

## 1 幼児の享受能力として可能な教育内容

- ① 感覚的機能（機敏性、反応力、反射性、精神的集中力、自動性、記憶力）などの目覚めと鋭敏化。
- ② 運動での緊張と弛緩の体得を通し直感力をもたせる。
- ③ 音楽的概念・要素の理解を持たせる（聴覚、視覚、触覚などで直接受け止めた音やリズムが知的背景を伴い行動させる）心身の協応力の確立。
- ④ 音感をつける（音に対する記憶力や自発性、意志を高め、音楽の喜びを知らせ芸術的経験を深める）
- ⑤ 即興的な演技力をつける（既成の歌曲指導だけでは期待できない音楽の喜びを知らせる）
- ⑥ 音楽的思考力を高める（課題の与え方を工夫し想像性、創造性を育む）

## 2 幼児リトミックの活動内容

### ① 音楽反応（音楽へのすばやい対応）

音楽の基礎訓練として重要な過程の1つであり、音楽での応答の意味を持っている。その活動には音楽を聴き「感じたことを目的に従って即時的に応答する」面と「自分の内面に描いた音楽思考を即時的に表明、表現していく」面とがあるが、ともに音楽と身体の動きが直結し即座に行動されるものであり通称「即時反応」と呼ばれている。時間的变化や強弱的变化を経験させることが出来る。また、時間と空間に従って行われる身体の弛緩と緊張の繰り返し、拍子感やリズム感に対する直感的把握力を養い精神的解放へと広がっていく。

この反応活動は、精神と身体とが完全に一致し調和が取れることが必要であり、能力の充実を図るためには緩急多岐にわたる変化と機敏性が要求される。

### ② リズム運動（音楽の流れと同時に、自然な運動で音楽に従う）

リズムは、音楽的個性を形成する要素として重要な分野を占め、ソルフェージュとも密接な関係を持つので幅広く総合的に扱われねばならない。

リズム運動は、内的諸能力の解放をはじめ感受性、表現能力、精神の集中性、自主性などを発達させる。各自がもつ自然リズムからテンポの発見へと進め、運動感覚と音楽とを結びつけバランスを会得させたい。また読譜力や記譜能力、創作能力といった技術面も要求されている。リズム運動で扱う動きは歩行（♪） 駆け足（♪） スキップ、ギャロップ（♪♪） ジャンプ（♪） スイング（♪） などである。この他に模倣動作も入れる。

### ③ ソルフェージュ（一定の間隔を置いて音楽を追いかけ再現させたり、目で見える表現にする）

リズム運動で訓練された身体の動きと音とを結びつけるための活動であり、音を聴く能力を付けることが主目的で、年齢に応じては読譜、書き取りといった高度な内容に到達させるような指導を行うが、低年齢の場合（2～4歳位）は、音質、高低、強弱、速度、和音、メロディーといった簡単な内容を、身体活動やゲーム的要素が含まれた遊びに託して会得させていく方法が取られる。その過程は、まず音を聴かせることから入り、次いで聴いたものを歌ったり反応動作（身体表現）したりするもので、音に対する集中力や反応力、反射性をもたせる一方、創造性、想像性、思考力を高めさせる。高年齢になり理解できる状態にあれば音符の読み書きへと発展させていくのであるが、幼稚園の集団活動では書かせることはほとんど実行されない。

①、②、③の活動は、ともに身体表現（模倣、即興、創作）歌唱（模倣、創作）演奏（打楽器による模倣や創作、旋律楽器による模倣や創作）などで行うものである。また、緊張と弛緩を巧みに組み合わせることも必要であるため、1つの活動に片寄らないような計画を立てねばならない。

### 3 幼児リトミック指導目標

未分化な幼児を対象としたリトミック指導の目標は

- ① 運動感覚(器用性)の発達を促す(感じたこと、考えたことなどが適切に表現できる力をつけさせる。このことによって、頭脳と身体が速く正しく密接に連結されるようになる)
- ② 表現の自由と統御力の養成(組織的で変化にとむ音楽のリズムを反射的に表現できるようにする。このことによって、頭脳と身体を有機的にコントロールすることが出来るようになる)
- ③ 集中力とその持続性の養成(みる、きく、考えるの力を付ける。このことによって、集中力や注意力が持続されるようになったときリトミック教育の効果が現れてくる)の3点である。

## Ⅲ 我が国におけるリトミック教育の歴史

リトミック教育が日本で最初に扱われたのは、ロンドンの俳優学校で直接ダルクローズのレッスンを受けたことのある市川左団次によって明治42年、教育界に先駆け舞踊、演劇界で始められた。明治43年から大正にかけ山田耕筰(作曲家)小山内薫(劇作家)伊藤道郎、石井漠、岩村和男(舞踊家)小林宗作(音楽教育)等が相次いでヘレラウのダルクローズ学校に学んだ。彼らは、帰国後、俳優志願の研究生(岩村和男)や宝塚少女歌劇団(石井漠)での基本訓練にリトミックを導入し舞踊界に大きな影響と革新を与え、独創性のある現代舞踊へと発展させていった。教育界でリトミックが行われるようになったのは、当時、新教育運動の先端をいく私立成城小学校(大正6年設立)に、幼稚園が設立(大正14年)そこの主事として迎えられた小林宗作によってであった。

小林宗作は、これまでにない教育をとということから幼、小の両方でリトミックの実践を行い、身体で学ぶことの重要性を説いていった。彼は再度渡欧し(昭和5年)ダルクローズに師事し舞踊や体操など幅広く学んでいる。翌6年ダルクローズよりリトミック協会日本設立の快諾を受け帰国、協会を設立する一方、幼児教育者をはじめ音楽教育に携わる者を対象として、音楽と結び付けた教育法の講習を盛んに行い、教育界におけるリトミックの普及に努めた。成城学園閉鎖に伴い、小林氏は東京の自由ヶ丘幼稚園・小学校の校長に就任(昭和12年)。ダルクローズの教育精神を実現させるリトミック教育を开花させていったが、当学園は戦争で焼失閉鎖された。戦後、国立音楽大学、同大付属幼稚園、小学校、大学併設の幼稚園教諭養成所で、その指導に当たり多くの後継者の養成に努め、幼児リトミック教育の基盤を築いていった。彼の没後は、弟子の1人であった板野平(国立音大)によってその普及は一層深められつつある。

いま1人リトミック教育の普及に力を入れたのが、体育ダンス系の天野蝶女史である。彼女もパリのリトミック学校に学ぶが、ダルクローズ没後であったため直接の指導は受けていない。彼女は、帰国後反応力、集中力、統御力などの養成を目的とした新しいリトミックの形を体育の中に基本訓練用として取り入れた天野式リトミック指導法を創案している。この方法は根本的にはダルクローズの教育理念が踏襲されているが「音楽家中心のピアノにたよる指導は、一般の指導者向きではない」という考えで、タンバリン式のリズム太鼓を使用した。

天野女史も小林氏と同様、幼児期のリズム教育にことに力を入れた。それは、幼児期が人間の一生を支配する重要な時期であり、身体でリズムを学ぶことが身体諸機能の発達をはじめ知的発達も促すと見たからである。天野女史は、指導について「分析されたリズム指導ではなく、生活の中で工夫された遊びを通して行ってこそ意義あるものになる」と主張している。

#### Ⅳ 活動への導入方法

リトミック活動の導入はまず模倣することと、音楽に合わせていろいろなステップを踏むことから始められる。

##### ① 模倣すること

模倣の方法は、目からの模倣（自然現象をはじめ指導者の真似など、見たものをそのまま真似る）と、耳からの模倣（聴いた音に合わせて手拍子、歩行など）があるが、ともに自然と人との調和の上に起こる現象を自然なリズムで受け止めるようにさせたい。また「よく見る」「よく聴く」ということが要求されるため、物事を分析する力や注意力、観察力が育成される。

初期の指導は、表現させたい対象を見せその様子を話し合う。身体の中のどの部分を使って「表すのがよいのか」を言葉で助言しながら、指導者も子どもとともに行動し表現の手段を知らせるようにするが、慣れてきたら指導者は動きから外れ、活動に適した効果音（音楽）を奏するなどして子どもの自発的な動きの誘発を心がければ動きは発展しだす。それは創作活動の素地を作ることにつながっていく。指導者がいつまでも中心的存在を固持し続けると子どもに依存心を抱かせ、消極的な動きで終わってしまうので活動への関与の方法に心せねばならない。

##### ② リズム運動（いろいろなステップを踏む）

我々の顔立ちがそれぞれ異なっているように、個々の持つリズムもそれぞれ違っている。音楽に合わせて揃ったステップを踏む（行進など）ということは、年少の子どもにとっては難しい行動の1つである。しかし、リズム運動の目的が「音楽に合わせていろいろなステップでリズムミカルに動けるように」とされている以上、音楽に合わせたステップが自由に踏めるようにさせなければならない。そのためにはリズム感を育成し正しく把握する習慣を身に付けさせることが必要である。そのための指導手順は次のようになる。

（イ）自分が持つリズムを知らせる（音を与えないで自由に動く）

（ロ）揃うことに対する美意識を高めさせる（音に合わせて手拍子、打楽器などを打つ）

（ハ）音楽をよく聴いて行動する（いろいろなリズムに合わせて動く自然運動）

（二）基礎的な音符の指導（音符の呼称と動きの関係を知る）










（イ）では音を全く与えないで言葉だけで指示し、室内を各自が自由に歩く、走る、スキップなど可能な動きをさせていく。このとき聞こえてくる足音にだけは注意するよう促す。いろいろなステップが自由に踏めるようになった段階で（ロ）の過程に進める。この課題では音楽に合わせて手を打つたり打楽器を打つたりする。このとき音楽に合わせてだけでなく、友達が出している音に対しても注意をはらわせるように仕向ける。全員の音が揃ったとき誉め言葉を与え美しいことを知らせる。（イ）（ロ）を適宜に繰り返すことにより、揃うことに対する美意識が高まっていく。そして音楽に合わせてようとする気持ちが生じ（ハ）へと進められる。

（ハ）の課題では単に速度の変化を捕らえた歩きをするだけではなく、音の強弱に対しても注意させ「大きく・強い動き」や「小さく・弱い動き」といったものも感じ取ることが出来るように指導されねばならない。こうした速度と歩幅の関係や歩幅と強弱表現の関係、音符の長さや動作の関係などは、子どもが興味を持つ動物に例えると理解も早く効果があげられる。

（二）基礎的な音符の指導

基礎的な音符の呼称とその歩き方は上記（ハ）の課題を進める中で扱われ出すが無理強いして教えるものではない。扱うときには、音符の呼び方を擬人化させるなどし興味をもたせ自分から知ろうとする姿勢が取られるようであればならない。

## 音符の呼び方と身体での表現方法

音符	呼び方	歩行動作	手拍子の仕方
	まる	ゆっくりした歩行1動作4ケ間	4ケ間で大きな輪を描きながら打つ
	しろてん	ゆっくりした歩行1動作3ケ間	3ケ間で中位の輪を描きながら打つ
	しろ	ゆっくりした歩行1動作2ケ間	2ケ間で普通の輪を描きながら打つ
	くろてん	(単独では使わない。八分音符と組み合わせて使う)	
	くろ	普通の速さでの歩行	1ケ間で輪を描くように打つ
	はた	駈け足	指先で小さく打つ
	スキップ	スキップ	指先で軽く弾んで打つ
	三本ばた	つま先の速い駈け足	斜め上から下に向かって刻み打ち
	二枚ばた	つま先の速い駈け足	弧を描くように小さく刻み打ち

## ③ その他の主要課題

イ 即時反応。この課題はリトミック活動のほとんど全部の課題の中に含まれるものである。感じ取ったリズムを即座に反応表現していく活動で、子どもの予想力を高め興味をもたせることができる。活動の方法には、命令順応法（指導者の合図に反応していく。注意力、集中力が育つ）、ステップ反応（指導者の演奏する音楽に合わせて手拍子を打った後で歩行する。記憶力が育つ）と、グループ反応（協力しながら音楽的な能力を高めることが出来る）がある。どの方法も指導者の明確でタイミングのよい合図が要求される。

ロ 速度変化。いろいろな速度に反応していく活動。自然に体得できるように子どもが興味を持つ題材を使って指示をだしながら曲の速さを変化させていく。

ハ 音の高低。音の高低変化を感じ理解させていく活動。両極端な音の高低から次第に中間音を、最終的には2音間の違い（和音）を理解させるなど音に対する鋭敏な感覚を養う。

ニ 音の強弱。音楽での動きの要素として理解させねばならない課題である。その動きは速度や歩幅と関連するので大きな音（象＝ff・できるだけ広い歩幅で力強く歩く）中間的な音（馬＝mf・普通の歩幅での歩行）小さな音（りす＝pp・狭い歩幅でつま先で歩く）といったように、動物を題材にすると想像しやすく興味をもたせた活動をさせることが出来る。

ホ 空間と方向。自分の周りの空間を知ることにより、変化する速度に合わせた動きの方法を体得させる。方向は音楽の表情を表すフレーズ感を知らせるものである。

ヘ アクセントと拍子。周期的に繰り返されるアクセントによって拍子が生じることを知らせる活動。アクセントの部分で強調動作（手を強く打つたり膝を深く曲げたりする）をする。慣れてきたら2, 3, 4拍子での歩行遊びや指揮をとることを指導していくが、子どもの生活が遊び中心であることを重視し、これらの活動もすべて遊びを通して行うことが肝要である。

## V 音楽的諸能力の診断

人が生まれながらに持っている音楽性は、育つ環境によりさまざまな現われ方をしていく。集団の場で音楽指導に当たる者は、だれしも子どもが持つ音楽能力や可能性を知り、その結果を反映させた指導のもとに、豊かな音楽的感性の育ちを願うであろう。

音楽的諸能力とその発達を知る方法として、諸活動を常時観察しその記録から傾向をつかんで評価していくごく一般的な方法と、幼児音楽適性診断テスト（音楽心理研究所発行）法とがあげられる。ここでは今回使用する幼児音楽適性診断テストについて触れることにする。



## リトミック指導を通してみた音楽的諸能力発達の追跡調査（その1）

### 1 テストの仕組み

このテストの仕組みは、子どもが興味を持ち理解しやすい動物の絵を見ながら、2つの音楽を聞き比べ、問いに対する判断をしていくものである。強弱、リズム、高低、音色、和音、鑑賞の6項目35の問題からなっている。質問はすべてカセットテープに収録されているので、担当者が質問に関する発言はしないでよい。しかし、子どもの開いたページが間違っていないかの確認や、テープ音が聞き取りやすいか、鉛筆の状態などへの注意、周りの環境状態（静かな落ち着いた雰囲気）への配慮を怠ってはならない。時には緊張を解放させるための「間」を持たせるなど、必要に応じた処置をとり良い状態で実施されたい。

### 2 テストの概要

- イ 強弱 2つの音楽を聞き比べどちらが強いかを判断させる。強い方に○印を付ける。
- ロ リズム 太鼓で打つ2つのリズムが同じか違うかを判断させる。同じに○印を付ける。
- ハ 高低A 笛で吹く2つの音を聞き比べ高い方に○印を付ける。  
高低B ピアノが奏でる2つの同じ旋律を聴き高い方に○印を付ける。
- ニ 音色 旋律の音色を聴き何の楽器で演奏しているのかを判断させる。1問に対し3つ描かれている絵の中から演奏楽器を選んで○印を付ける。
- ホ 和音A 2つの和音を比較する問題で、3つの重なった音と同じか違うかを判断させる。同じなら○、違うなら×印を付ける。  
和音B 数個の和音のつながり（和声）を比較する問題で、2つの和声が同じか違うかを判断させる。同じなら○、違うなら×印を付ける。
- ヘ 鑑賞 音楽の曲想を捕らえさせる問題。対照的な情景を描いた2つの絵から、どちらが聴いている音楽のイメージに合うかを判断させる。合うと思う方に○印を付ける。

回答結果を点数化し、それぞれの分野の得点で子どもの発達段階を見ていくものである。テストは定期的に期間を置いて数回行うことが望ましいとされている。

### 3 テストの実施に関して

被験者が3歳児という年齢を考慮し、3項目（強弱、リズム、高低）での実施を計画する。しかし、回答記入が未だ無理ということから、同じ問題を使用した観察法に切り替え、クラス全体の活動を通して理解の割合を見ることにした。従って、個々の子どもの音楽的能力の発達程度を知ることが出来ず、大雑把な結果しか得られなかったが参考までに記載する。

クラス名	人数	強 弱	リズ ム	高 低
M クラス	23名	14 (61%)	18 (78%)	17 (74%)
T クラス	23名	16 (69%)	16 (69%)	16 (69%)
Y クラス	23名	16 (69%)	20 (87%)	18 (78%)
合 計	69名	46 (67%)	54 (78%)	51 (74%)

ここに表した実数は、子どもの状態が一番良くなったところをカウントしたものである。従って、実際には理解されていなくても、友達の真似で行動している子もいたと思われる。回答記入ができるようになる時期を待ち確実なものを知りたい。

## VI リトミック教育の実践

### 1 今年度のねらい

3歳児は音楽的活動に親しみをもたせ、音楽することの楽しさや感動する心の芽生えをもた

せることが大切な時期である。また、音感とリズム感が融合して発達する時期でもある。そこで、こうした特徴をふまえ以下のようなねらいを持ってみた。

① 基本的な動きがスムーズにできる

歩いたり走ったりなどの身体表現を通し、自然な動きから音を感じリズムに合わせた動きができるようにさせる (いろいろなリズムの習得)

② 豊かな創造性をもたせる

直接的な働きかけをもつ視覚的活動 (触覚、聴覚からのイメージも取入れる) から、自分自身の自由な表現ができるようになる。(模倣から創作へ・即時反応から創造的表現への発展)

③ 音楽的技能と概念 (練磨を図るのではなく、経験することから理解をもたせていく)

メロディ = 音の高低。始めと終わり、同じと違うの対比など (歌曲を使って)

リズム = 音の強弱、速度、長短

2 年間計画

年間計画を立てるに当たって、子どもの音楽的能力を反映させたものにしたいという考えから、まず最初に音楽適性診断テストを実施する予定であったが「入園まもない4月下旬の3歳児では質問に対する理解反応を記号 (○・×) で表すことは出来ない」という園側の指示から、テスト結果を反映させての立案は不可能となったため、市販のテキストより抜粋する。

年間計画表

	一 学 期	二 学 期	三 学 期
即時反応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぶらぶらポン</li> <li>・お散歩</li> <li>・くまさん</li> <li>・頭、肩、ひざ、ポン</li> <li>・ドンすわれ</li> <li>・カラーボード</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森の動物さん</li> <li>・バスごっこ</li> <li>・ボールであそぼ</li> <li>・ボートこぎ</li> <li>・カラーボード</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごあいさつ</li> <li>・いもむしさん</li> <li>・王様とカンムリ</li> <li>・赤信号</li> </ul>
動きの基礎練習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あしふみたんたん</li> <li>・小さくなれ大きくなれ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな歩き方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スティックあそび</li> </ul>
音 (高低・強弱)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おへんじ</li> <li>・うさぎとかめ</li> <li>・やまびこ</li> <li>・大きな太鼓小さな太鼓</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おへんじ</li> <li>・肩たたき</li> <li>・ごあいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かたたたき</li> <li>・まねっこ</li> </ul>
拍と数 (拍子)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まねっこ</li> <li>・くだもの</li> <li>・私はだーれ(動物で)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・くだもの</li> <li>・大工さん</li> <li>・かなづちトントン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかな</li> <li>・ぶらんこ</li> </ul>
あそびうた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ことりのうた</li> <li>・ひげじいさん</li> <li>・かえるのうた</li> <li>・はじまるよ</li> <li>・落ちた落ちた</li> <li>・あく手でこんにちわ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな栗の木の下で</li> <li>・どんぐりころころ</li> <li>・上がり目下がり目</li> <li>・バスバスはしる</li> <li>・ロンドン橋</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なんでしょ</li> <li>・たこの歌</li> <li>・雪のこぼうず</li> <li>・いもむしごろごろ</li> <li>・手をたたきましょ</li> </ul>
その他の教材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・僕のミックスジュース</li> <li>・人間ていいな</li> <li>・先生とおともだち</li> <li>・お花がわらった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カレーライス</li> <li>・こうろぎ</li> <li>・ぞうさん</li> <li>・とんぼのめがね</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふしぎなポケット</li> <li>・春がくる</li> <li>・数字の歌</li> </ul>

実際の指導はこの年間計画に沿って、各クラスで子どもの反応を見ながら担当学生が毎回細案を立てるものである。参考までに活動展開された学生の細案の1例を記す。

リトミック指導を通してみた音楽的諸能力発達の追跡調査（その1）

3 指導計画（細案）6月19日に実施

- ・ 本日の指導内容 拍打ちを使った名前の呼びかけと返事・音の強弱認知「落ちた落ちた」手遊び「ひげじいさん」 イメージ童話「みつばちマーヤの冒険」（軍手で作った人形を使う）
- ・ ねらい 前回に続き拍打ちをしながら友達の名前他いろいろな物の名前を呼び合い、拍の流れをつかませる。曲に合わせた動き（即時反応）で楽しく遊べるようにさせる。

時間	環境構成と幼児の活動	援助と留意点	記 録
10:50	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机や椅子を廊下に出し広い場所を作る</li> <li>・指導者の声に誘われあいさつをする</li> <li>・思い出した子が拍打ちを始める</li> <li>・わんわんわん(手を打ちながら言う) 言われた動物の鳴き真似をする</li> <li>・手をにぎり「うん」の動作をする</li> <li>・はあい「うん」の練習をする</li> <li>・男の子が返事をする</li> <li>・女の子が返事をする</li> <li>・呼ばれた子が一人で返事をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもも一緒に机運びをするよう声をかける</li> <li>・元気よく声をかける</li> <li>・前回やった拍打ちを思い出させるような言葉をかける</li> <li>・いぬさん、他鳴き真似のしやすい動物の名をあげていく</li> <li>・休符「うん」の理解をもたせる</li> <li>・クラスの名前を呼び、3つ打ち1つ休みの練習をさせる</li> <li>・男女別で呼びかける(結果をみて誉めたり励ましたりする)</li> <li>・上手に出来る子の名前を呼ぶ</li> </ul>	
11:05	<ul style="list-style-type: none"> <li>・隣の子と手をつなぎ輪をつくる遊びをはじめる。呼ばれたら返事をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お返事ハイの遊びをすることを促す</li> <li>・5回位繰り返す</li> </ul>	
11:15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちてくるものに期待する</li> <li>「・りんご 両手で受け止める</li> <li>・かみなり おへそを押さえる</li> <li>・げんこつ 頭を押さえる」など楽しそうに表現する ふざける子もいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちた落ちたの遊びをすることを告げる(何が落ちてくるか期待をもたせながら数回繰り返す)</li> </ul>	
11:20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひげじいさんの手遊びをする(楽しそうに指導者の真似をする)</li> <li>・お話を聞きやすいように指導者の周りに集まって座る 拍手をしながら待つ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひげじいさんをすることを告げる(数回繰り返す)</li> <li>・お話「みつばちマーヤの冒険」を聞かせる 表情豊かに</li> <li>・今月の歌に表現をつけて歌う</li> </ul>	
11:25	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「かえるのうた」を歌う 表現を見ている 真似る子もある</li> <li>・終わりのあいさつをする</li> <li>・みんなで手伝う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・終わりを告げ、机、椅子を元に戻す手伝いを促す</li> </ul>	

4 現在までの実践報告

① 実践方法

リトミック指導の開始は平成9年5月からで、前期期間は週1回、木曜日（園行事の都合で変更もあった）に行ってきた。活動時間は毎回約3～40分（子どもの活動状態によって多少時間を変動することもあった）である。対象は、本学付属幼稚園3歳児全員（69名・3クラス）

で、指導場所は、子どもの心理状態を考えそれぞれの保育室で行うことにした。

指導者は本学児童教育学科4年音楽第一ゼミナール所属学生10名があたる。担当クラスは固定し、指導者、ピアノ伴奏者、記録係り（指導者の補助を兼ねる）は、毎回交代制をとる。指導に至る手順としては、その回の指導にあたる学生が中心となり、前回の反省と記録を基に指導計画を作成し指導の練習を行い実践に臨む。事後は反省（計画、指導方法、教材の適否を検討）と子どもの活動状態の変化（発達）の記録をなし次回につなげるようにしている。

## ② 考察

現在までの実動回数は10回であるが、夏休みによる空間もはさまれているため、際だった変化や進歩は見られていない。しかし、回を重ねる毎に子どもの理解と反応が早くなっていることは確実である。特に前回の復習的活動に対する反応は顕著で、予期していない活動（創作）に発展していくこともある。しかし、発展した場合臨機応変の対応が未熟な学生は、計画の変更や時間の延長を気遣うのかそれを阻止し、他の活動へ転換させようとするため子どもの興味が失われてしまう。発展された活動への対応方法について学ぶ必要がある。

表現技術が未熟でその手だてを知らない3歳児にとって、指導者の言葉がけや動きは非常に大切である。当然のことではあるが、話し掛ける声の大きさ、抑揚、タイミングが良いと反応は早い。動きもリズムカルなものを感じたとき真似ようとする行動に出てくる。従って、子どもの前に立つ者は、話術を高め軽快さを感じさせる身振りが取れるようではならぬ。指導者の姿がそのまま子どもに影響していくことを心し、短時間といえども信頼関係が生まれるようではならぬ。この点に関しては、子どもたちから「また来てね、今度は何する」といった期待の言葉が聞けることで、この指導に打ち込む学生たちの気持ちが子どもたちに伝わるのではないかと思われる。

即時反応は速さと正確さを身につけさせるものであるから、受動的、反射的（刺激→感覚「見る、聴く、触る」→頭脳「思考・判断」→運動神経→身体表現の順に現れる）反応訓練を繰り返えし経験させねばならない。こうした時、訓練的活動として扱えば子どもはすぐ飽きてしまうので、経験させる内容は同じであっても形が変わった遊びで行うことが必要である。この点に関する学生たちの理解は深く、リズム打ちなど毎回題材を変え楽しく活動させていた。

リズム反応（身体表現）の活動で欠かせないのは楽器（ピアノ）伴奏である。この伴奏音は子どもの活動に対する意気を高揚させ活動を活発にさせる効果がある。また、流暢な響きに美を感じたとき感性が育まれる。従って「単に伴奏すればよい」ではなく、子どもの動きに合った適切な音、しかも美しい響きであることが要求される。この指導では、指導者と伴奏者が別であるため両者の連携がスムーズでなければならない。また、子どもの活動状態や指導者の言葉から臨機応変の対処が必要なこともあるので、事前の練習時に打ち合わせた曲をアレンジし即興演奏出来る力も持ちたいものである。この点に関しては可能者と不可能者がある。楽器演奏は得手不得手もあるが、今後前向きの姿勢で技術向上に努めてほしい。

指導経験が未熟な学生に求めることは未だ無理と思われるが、毅然とした態度の中に優しさと厳しさを持ってほしい。また、常に子どもの行動を見逃してはならない。子どもにやる気と自信を持たせるためには優しさ（認める、励ます、誉める）が大切であるが、ときには厳しさ（叱る・注意する）も必要である。優しさと厳しさの関係は、リトミック活動の中の緊張と弛緩の関係ともつながり、うまく使い分けることによって教育効果を上げることが出来る。活動途中で教具（ペープサート）を持ち出す勝手を許し収集のつかない状態になったことがあった。学生の反省にもあげられていたが、こうした時には「厳しさ」をもつべきであろう。

以上が指導をしている学生の姿を見て感じたことや、学生から出された記録からの考察である。なお、学生の言をかりれば「文献では分からない子どもへの対応の仕方、リトミック教育の効果と重要性などを体験から理解することができ勉強になる」と喜んでいる。

今後の課題として、立案に際し園生活の流れを知ることがあげられる。何故なら、子どもの表現活動は日常生活と結びついた題材が望ましく、音楽と動きのパターンが一致することが大切であるからだ。

今しばらくは、現在の学生（4年生）によって指導が続けられていく。今までの反省点を踏まえ、子どもの成長に合わせた活動がさせられるように研鑽をつませたい。

### おわりに

音楽教育は「これでなければならない」という方法は1つもない。しかし、感動の心呼び覚まし、音楽的な生来の才能が伸ばせる環境の基に、豊かな感受性が育まれる方法がとられねばならない。また、ごく幼い時から経験させる活動であるだけに「音を楽しむ」音楽で、「音を苦しむ」音が苦であってはならない。そのためには子どもの特性や生活を考慮した方法で教育されることが望ましい。知能の発達が著しい幼児期に高められた感覚機能は、その後段階的に発達し、さまざまな能力を引き出していく。子どもの伸びる可能性は無量大である。

リトミック教育は特殊な音楽教育方法として受け止められていたが、幼児教育の現場でも年々浸透しだしている。それは、この教育方法が音楽のみならず、全人格を発達させることに力点が置かれ、子どもの生活すなわち遊びに合わせた活動がさせられるからである。興味や関心をもたれた遊びからは、子どもにとって重要な能力（適応性、機敏性、反応力、思考力、積極性、自発性、同化力）が育成されていく。

幼児を対象にリトミックの指導を手がけ、その教育方法を学び技術の向上を図るとともに、子どもの音楽的諸能力の発達段階を知るという課題は、音楽第一ゼミナールの研究テーマとして以前から実施していたことである。これまでも、協力していただいた数ヶ所の幼稚園で学生による指導実践を行ってきたが、園側の都合もあり毎年同年齢の子どもを対象としていた。従って、1年間での音楽的諸能力の発達を見ることは出来ても、継続的な観察をした結果から年齢成長に伴う能力の発達を見ていくことは不可能であった。今年度、本学付属幼稚園で実践の場を与えて頂いたのを契機に、3歳児から学齢に達するまでの音楽的諸能力の現われ方とその発達を継続的に観察し、成長に伴う音楽カリキュラムの作成に発展させていきたい。

今回は、文献並びに実践面の中間報告が主となってしまい、音楽的諸能力の発達に関する詳細な結果を記すことが出来なかった。それは、聞き取って記載する能力、判断する能力が未だ未熟な3歳児を対象に、音楽的諸能力の診断テストを試みようとした計画が多少無理であったことからである。テストの方法、判断に甘さがあったことを反省している。現3歳児の成長に伴い、テストの実施も可能になるであろう。その期を待ち定期的に適正診断テストを実施し発達を追っていきたい。

### 参考文献

- 1 エミール・ジャック・ダルクローズ著 板野 平訳 1975 リズムと音楽と教育  
全音楽譜出版社
- 2 エミール・ジャック・ダルクローズ著 板野 平訳 1986 リトミック芸術と教育  
全音楽譜出版社

- 3 フランク・マルタン著 板野 平訳 1977 エミール・ジャック・ダルクローズ  
全音楽譜出版社
- 4 エリザベス・バンドウレスバ著 石丸由里訳 1966 ダルクローズのリトミック  
ドレミ出版社
- 5 板野 平著 1982 みんなでやろうリトミック ひかりのくに株式会社
- 6 岩崎光弘著 (代表) 他3名 1987 リトミック年間カリキュラムとその実践  
日本ビクター株式会社
- 7 板野 平著 1973 音楽反応の指導法 国立音楽大学
- 8 真篠 将 (代表) 他2名 1987 幼児音楽適性診断テスト検査法 日本文化科学社